

改訂の主旨を生かす「保育内容言葉」の授業 —— 幼稚園教育要領並びに保育所保育指針の新旧を比較して ——

Lesson of “childcare content words” which makes use of the point of the revision
—— Comparing old and new “Course of study for kindergarten”
and “Guideline of nursing at nursery center” ——

太 田 俊 一* 中 島 啓 子*
Shunichi OHTA Keiko NAKAJIMA

I. 研究の概要

- 幼稚園教育要領並びに保育所保育指針の改訂について
- 保育内容言葉：幼稚園教育要領並びに保育所保育指針の新旧内容比較
- 保育内容言葉：改定の意義を捉えたシラバスの工夫
- 学生の調査による自身の喃語の発達
- 乳児の表情（3枚の写真）から読み解く
- 体験と言葉掛けを重視した授業を目指して

II. 幼稚園教育要領並びに保育所保育指針の改訂について

～体験と言葉掛けを大切に～

平成30年度から「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」が改訂されることを受け、全国各地で研修会が開かれ、国の委員として改定に携わった諸先生方も、講師としてその方向性をお話しされている。研修会等でお聞きした話を私共なりに、次の5点に集約してみた。

1. 遊びを通して豊かな感性や協調性を育む「幼児教育」が指針に積極的に位置付けられたことを踏まえた上で、子供たちへの愛情豊かな言葉掛けや、生活の中での体験を大切にすることで子供たちの力を伸ばすこと
2. 今回の保育指針改定は2008年以来10年ぶりで、2018年4月に施行される。前回改定以来、0～2歳の保育所利用児童数が増え、子育て家庭の孤立感も高まっていることを踏まえて検討されたこと
3. 1歳以上3歳未満児については、保育指針の周知段階において3歳児以上とは別に説明がなされるなど、記載内容が充実し「愛情豊かに、応答的に行われること」と書かれたこと
4. 3歳児以上については、主体的な遊びを通じた総合的な「幼児教育」が改めて明確に位置

付けられ、幼稚園と幼保連携型認定こども園の基準と同様の文言で、小学校に入るまでの「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が示されたこと

5. 子どもたちの日々の小さな体験が乏しくなっており、0歳からの生活の中に体験が根差しているとし、この体験不足が子供たちを大きく取り巻いていることから、それぞれの園で何が必要か考えた「幼児教育」を行うこと

本学科の資格取得の特徴のひとつが「保・幼・小の3免取得」であることを考えると、今回の改訂の大きな特色として「小学校との円滑な接続」のため「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が最上位の目標として掲げられ、それを達成するために保育計画を策定し、評価し、改善していくとなったことは、本学科にとって大きな方向性を示していると考えられる。

Ⅲ. 「保育内容言葉」の新旧内容比較

【幼稚園教育要領】

【言葉】(旧) 幼稚園教育要領(2008年版)(以下、旧と略する)

経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。

1 ねらい

- (1) 自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。
- (2) 人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。
- (3) 日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、先生や友達と心を通わせる。

2 内容

- (1) 先生や友達の言葉や話に興味や関心を持ち、親しみをもって聞いたり、話したりする。
- (2) したり、見たり、聞いたり、感じたり、考えたりなどしたことを自分なりに言葉で表現する。
- (3) したいこと、してほしいことを言葉で表現したり、分からないことを尋ねたりする。
- (4) 人の話を注意して聞き、相手に分かるように話す。
- (5) 生活の中で必要な言葉が分かり、使う。
- (6) 親しみをもって日常のあいさつをする。
- (7) 生活の中で言葉の楽しさや美しさに気付く。
- (8) いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする。
- (9) 絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像をする楽しさを味わう。
- (10) 日常生活の中で、文字などで伝える楽しさを味わう。

3 内容の取扱い

上記の取扱いに当たっては、次の事項に留意する必要がある。

- (1) 言葉は、身近な人に親しみをもって接し、自分の感情や意志などを伝え、それに相手が応答し、その言葉を聞くことを通して次第に獲得されていくものであることを考慮して、幼児が教師や他の幼児とかかわることにより心を動かすような体験をし、言葉を交わす喜びを味わえるようにすること。
- (2) 幼児が自分の思いを言葉で伝えるとともに、教師や他の幼児などの話を興味をもって注意して聞くことを通して次第に話を理解するようになっていき、言葉による伝え合いができるようにすること。
- (3) 絵本や物語などで、その内容と自分の経験とを結び付けたり、想像を巡らせたりするなど、楽しみを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージをもち、言葉に対する感覚が養われるようにすること。
- (4) 幼児が日常生活の中で、文字などを使いながら思ったことや考えたことを伝える喜びや楽しさを味わい、文字に対する興味や関心をもつようにすること。

【言葉】(新) 幼稚園教育要領(2018年版)(以下、新と略する)※下線は主な変更点

経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。

1 ねらい

- (1) 自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。
- (2) 人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。
- (3) 日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、先生や友達と心を通わせる。

2 内容

- (1) 先生や友達の言葉や話に興味や関心をもち、親しみをもって聞いたり、話したりする。
- (2) したり、見たり、聞いたり、感じたり、考えたりしたことを自分なりに言葉で表現する。
- (3) したいこと、してほしいことを言葉で表現したり、分からないことを尋ねたりする。
- (4) 人の話を注意して聞き、相手に分かるように話す。
- (5) 生活の中で必要な言葉が分かり、使う。
- (6) 親しみをもって日常の挨拶をする。
- (7) 生活の中で言葉の楽しさや美しさに気付く。
- (8) いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする。
- (9) 絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像をする楽しさを味わう。
- (10) 日常生活の中で、文字などで伝える楽しさを味わう。

3 内容の取扱い

上記の取扱いに当たっては、次の事項に留意する必要がある。

- (1) 言葉は、身近な人に親しみをもって接し、自分の感情や意志などを伝え、それに相手が応答し、その言葉を聞くことを通して次第に獲得されていくものであることを考慮して、幼児が教師や他の幼児と関わることにより心を動かされるような体験をし、言葉を交わす喜びを味わえるようにすること。
- (2) 幼児が自分の思いを言葉で伝えるとともに、教師や他の幼児などの話を興味をもって注意して聞くことを通して次第に話を理解するようになっていき、言葉による伝え合いができるようにすること。
- (3) 絵本や物語などで、その内容と自分の経験とを結び付けたり、想像を巡らせたりするなど、楽しみを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージをもち、言葉に対する感覚が養われるようにすること。
- (4) 幼児が生活の中で、言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにすること。その際、絵本や物語に親しんだり、言葉遊びなどをしたりすることを通して、言葉が豊かになるようにすること。
- (5) 幼児が日常生活の中で、文字などを使いながら思ったことや考えたことを伝える喜びや楽しさを味わい、文字に対する興味や関心をもつようにすること。

【幼稚園教育要領における「保育内容言葉」領域の主な改訂点】

1. ねらいの(3)「言葉に対する感覚を豊かに」の挿入から読み取れること
 - (1) これには日本語表記が簡略化されつつあることや、繊細な言い回しが特徴だった日本語がだんだん廃れてきているといった現状が見て取れる。
 - (2) 感覚には、言葉を発するときの状況判断と語彙の豊富さはもちろん、言葉を受け取る時の、すなわち聞くときの感覚の豊かさも、幼児の時から身につけるべきものと捉えられる。
 - (3) 気持ちのこもった挨拶の在り方や、時間や場所をわきまえた挨拶の仕方、また目上の者に対する挨拶の在り方など、幼稚園の日常生活の中で学んでいく意義は大きいと考えられる。
2. 内容の取り扱い「心を動かすような体験」から「心を動かされるような体験」の言い換え
 - (1) 幼児が主語であることは変わりがないことから、もちろん主客が逆転したわけではない。
 - (2) 感動は自らの中に引き起こすものがあるのではなく、外的なものが誘引して自らの中にわき上がるものとする、「動かされる」という表現がより適切と判断されたと考える。
3. 取り扱いの「旧(4)」を「新(4)」と「新(5)」に分割
 - (1) 「新(4)」は、「聞く」「読む」「話す」「遊び」など、コミュニケーションを中心とした活動を通して、言葉を豊かに育てることをねらっている。

(2)「新(5)」は、言葉領域の中でも、「書く」「読む」といった文字を扱うことに重点をおいた活動を通して、伝えることへの興味関心に重点をおいている。

【保育所保育指針】

【言葉】(旧) 保育所保育指針(2008年版)(以下、旧と略する)

経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。

(ア) ねらい

- ①自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。
- ②人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。
- ③日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、保育士等や友達と心を通わせる。

(イ) 内容

- ①保育士等の応答的な関わりや話しかけにより、自ら言葉を使おうとする。
- ②保育士等と一緒にごっこ遊びなどをする中で、言葉のやり取りを楽しむ。
- ③保育士等や友達の言葉や話に興味や関心を持ち、親しみを持って聞いたり、話したりする。
- ④したこと、見たこと、聞いたこと、味わったこと、感じたこと、考えたことを自分なりに言葉で表現する。
- ⑤したいこと、してほしいことを言葉で表現したり、分からないことを尋ねたりする。
- ⑥人の話を注意して聞き、相手に分かるように話す。
- ⑦生活の中で必要な言葉が分かり、使う。
- ⑧親しみを持って日常のあいさつをする。
- ⑨生活の中で言葉の楽しさや美しさに気付く。
- ⑩いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする。
- ⑪絵本や物語などに親しみ、興味を持って聞き、想像する楽しさを味わう。
- ⑫日常生活の中で、文字などで伝える楽しさを味わう。

【言葉】(新) 保育所保育指針(2018年版)(以下、新と略する)※下線は主な変更点

経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。

(ア) ねらい

- ① 言葉遊びや言葉で表現する楽しさを感じる。
- ② 人の言葉や話などを聞き、自分でも思ったことを伝えようとする。
- ③ 絵本や物語等に親しむとともに、言葉のやり取りを通じて身近な人と気持ちを通わせる。

(イ) 内容

- ① 保育士等の応答的な関わりや話しかけにより、自ら言葉を使おうとする。
- ② 生活に必要な簡単な言葉に気付き、聞き分ける。
- ③ 親しみをもって日常の挨拶に応じる。
- ④ 絵本や紙芝居を楽しみ、簡単な言葉を繰り返したり、模倣をしたりして遊ぶ。
- ⑤ 保育士等とごっこ遊びをする中で、言葉のやり取りを楽しむ。
- ⑥ 保育士等を仲立ちとして、生活や遊びの中で友達との言葉のやり取りを楽しむ。
- ⑦ 保育士等や友達の言葉や話に興味や関心をもって、聞いたり、話したりする。

(ウ) 内容の取扱い

上記の取扱いに当たっては、次の事項に留意する必要がある。

- ① 身近な人に親しみをもって接し、自分の感情などを伝え、それに相手が応答し、その言葉を聞くことを通して、次第に言葉が獲得されていくものであることを考慮して、楽しい雰囲気の中で保育士等との言葉のやり取りができるようにすること。
- ② 子どもが自分の思いを言葉で伝えるとともに、他の子どもの話などを聞くことを通して、次第に話を理解し、言葉による伝え合いができるようになるよう、気持ちや経験等の言語化を行うことを援助するなど、子ども同士の関わりでの仲立ちを行うようにすること。
- ③ この時期は、片言から、二語文、ごっこ遊びでのやり取りができる程度へと、大きく言葉の習得が進む時期であることから、それぞれの子どもの発達の状況に応じて、遊びや関わり工夫など、保育の内容を適切に展開することが必要であること。

【「保育内容言葉」領域の主な改定ポイント】

2008年版よりも大幅に内容や表現が変わり、幼稚園教育要領よりも大きく変更された感は否めない。したがって、2008年版まではほとんど同じ内容で、同じ表現だった保育所保育指針と幼稚園教育要領が、共通性から独自性に踏み出したと言っても過言ではないと思われる。ここでは2008年版からの大きな変更点について考えてみたい。

1. (ア) ねらい

(1) 言葉遊びや言葉で表現する楽しさを感じる。

- ① 「自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう」という、内面にあるものを外に向けて発せられる言葉表現そのものの楽しさを感じさせる活動から、言葉を使って遊んだり表現したりする活動から楽しさを感じさせる活動へと重点が移り、より一層活動重視となっている。

(2) 人の言葉や話などを聞き、自分でも思ったことを伝えようとする。

- ① 「人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう」ということから、幼児が自分で活動したことなどを通して、思ったことや思っていることを伝えようとするというものになった。このことから、経験量の大きく異なる

幼児の発達段階として、経験してきたことを伝え合うことよりも、人とのコミュニケーションを通して、思ったことを伝えるということを重視したと言える。

(3) 絵本や物語等に親しむとともに、言葉のやり取りを通じて身近な人と気持ちを通わせる。

- ① 「日常生活に必要な言葉が分かるようになる」とともに、絵本や物語などに親しみ、保育士等や友達と心を通わせる」のところで、特に、「日常生活に必要な言葉が分かるようになる」よりも、「絵本や物語に親しむ」といったより具体的なものを明示したと言える。
- ② 言葉が分かるという知識理解を重視するような視点ではなく、保育所でのどのような活動を示すのか、また発展としてどんなことが考えられるのかという幅を持たせ、幼児の興味関心をより取り入れやすくしたと言える。

2. (イ) 内容

(1) 保育士等の応答的な関わりや話しかけにより、自ら言葉を使おうとする。

- ① (1) については、旧①から変わっていない。

(2) 生活に必要な簡単な言葉に気付き、聞き分ける。

- ① 旧⑦の「生活の中で必要な言葉が分かり、使う」を変えたと考えられる。簡単な言葉、そして分かる内容を、気付いて、聞き分けることと定義した。

(3) 親しみをもって日常の挨拶に応じる。

- ① 旧⑧の「親しみを持って日常のあいさつをする」では、挨拶がひらがなになった。

(4) 絵本や紙芝居を楽しみ、簡単な言葉を繰り返したり、模倣をしたりして遊ぶ。

- ① 旧⑩の「絵本や物語などに親しみ、興味を持って聞き、想像する楽しさを味わう」のところでは物語だったが、ここに紙芝居を位置づけた。簡単な言葉の繰り返しと模倣遊びへと変わったことも、幼児が繰り返しの言葉や模倣に対して、強い興味関心を持つという発達段階や実態を重視している。

(5) 保育士等と一緒にごっこ遊びなどをする中で、言葉のやり取りを楽しむ。

- ① 旧②と変わっていない。

(6) 保育士等を仲立ちとして、生活や遊びの中で友達との言葉のやり取りを楽しむ。

- ① 旧⑥の「人の話を注意して聞き、相手に分かるように話す」及び旧⑨の「生活の中で言葉の楽しさや美しさに気付く」とを合わせ、生活や遊びの中での言葉のやりとりや、言葉のやりとりを楽しむために、保育士の役割の大切さを前面に出している。

(7) 保育士等や友達の言葉や話に興味や関心をもって、聞いたり、話したりする。

- ① 旧③の「保育士等や友達の言葉や話に興味や関心を持ち、親しみを持って聞いたり、話したりする」において、聞いたり、話したりすることが求められたが、言葉のやりとりを楽しむことに集約され、保育士や友達といった人との関わりが重視されている。

3. (ウ) 内容の取扱い

2008年版では、項がなかった「内容の取扱い」の中で、取扱いに当たっては、次の事項に留

意する必要があるとして、旧（イ）内容の①～⑫の中で、新（イ）内容とは直接的につながっていない次の4項目を総括的に取り上げている。

- ④ したこと、見たこと、聞いたこと、味わったこと、感じたこと、考えたことを自分なりに言葉で表現する。
- ⑤ したいこと、してほしいことを言葉で表現したり、分からないことを尋ねたりする。
- ⑩ いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする。
- ⑫ 日常生活の中で、文字などで伝える楽しさを味わう。

これは内容として述べることより、留意点として別記する方が、今回の改訂の趣旨に沿って強調しているものと考えられる。したがって、以下の「取扱い」については、十分にその趣旨を読み取る必要があるものとする。

- ① 身近な人に親しみをもって接し、自分の感情などを伝え、それに相手が応答し、その言葉を聞くことを通して、次第に言葉が獲得されていくものであることを考慮して、楽しい雰囲気の中で保育士等との言葉のやり取りができるようにすること。
- ② 子どもが自分の思いを言葉で伝えるとともに、他の子どもの話などを聞くことを通して、次第に話を理解し、言葉による伝え合いができるようになるよう、気持ちや経験等の言語化を行うことを援助するなど、子ども同士の関わりの中での仲立ちを行うようにすること。
- ③ この時期は、片言から、二語文、ごっこ遊びでのやり取りができる程度へと、大きく言葉の習得が進む時期であることから、それぞれの子どもの発達の状況に応じて、遊びや関わり工夫など、保育の内容を適切に展開することが必要であること。

特に、③の中の「大きく言葉の習得が進む時期である」という規定は、乳児期の「喃語」からはじまり、日本語として徐々に豊かになっていく過程を「片言から、二語文、ごっこ遊びでのやり取りができる程度」と規定していることから強調されていることが分かる。

IV. 改定の意義を捉えたシラバスの工夫

2018年版で強調されたり、新しく付加されたことを、本学科のシラバスの中で重点的に取り上げ、2008年版のシラバスを改訂したものが以下の通りである。とくに、下線の部分が改訂の趣旨を強調したところである。

<2017年版シラバス>

1 オリエンテーション

○五領域の中での「言葉」の位置づけ

2 保育内容言葉とはどのようなのか①

・保育の目標から ・保育の内容から ・人にとって言葉とは？

3 保育内容言葉とはどのようなものか②

・言葉の機能 ・文字化したときの機能

4 言葉の育ち方①<言葉話す前>

○自分の喃語を調べる

- ・ 0歳（1～3ヶ月の頃） ・ 0歳（4・5ヶ月の頃）

5 言葉の育ち方②<自分の喃語>

- ・ 0歳（6・7ヶ月の頃） ・ 0歳（8ヶ月の頃）

6 言葉の育ち方③<言葉話せるようになって>

- ・ 1～2歳児の言葉の成長

- ・ 3～5歳児の言葉の成長

7 言葉を育むための保育者の関わり方や役割①

- ・ 話し合いの時 ・ けんかやトラブルの時

8 言葉を育むための保育者の関わり方や役割②

- ・ 言葉に関わる問題 ・ 良い言葉掛けとは？

9 言葉に関わる指導計画①

- ・ 保育における日案（設定保育） ・ 実習用に書き換えてみよう

10 言葉に関わる指導計画②

- ・ 保育における日案（完全保育） ・ 実習用に書き換えてみよう

11 言葉（会話）を大切にしたい紙芝居の作成①

- ・ 絵本を決めあらすじを考える ・ テーマ、登場人物を決める

12 言葉（会話）を大切にしたい紙芝居の作成②

- ・ 会話だけのコマ割りを作る ・ 会話のコマ割にラフ絵を描く

13 言葉（会話）を大切にしたい紙芝居の作成③

- ・ 厚手のケント紙への清書（1） ・ 表に絵を、裏に会話を書く

14 言葉（会話）を大切にしたい紙芝居の作成④

- ・ 厚手のケント紙への清書（2） ・ 表に絵を、前の裏に読みを書く

15 ○言葉（会話）を大切にしたい紙芝居の作成⑤

○紙芝居発表会を行う

- ・ クラス毎に発表会を行う ・ クラスの優秀作品を鑑賞する

【シラバスの主な改定ポイント】

1. 乳児期の「喃語」の調査を自分自身を対象として実施する。
2. 自分自身の喃語実態を主体的に調べ、それをもとに、調査集約を学級全体そして学年全体へと広げること（V章参照）で、喃語の共通点や相違点を探る。（0歳児）
3. 日本語が徐々に豊かになり「片言から、二語文、ごっこ遊びでのやり取りができる程度」へと発達する過程を理解する。（1歳児～3歳児未満児）
4. 旧①の「絵本や物語などに親しみ」から、新④「絵本や紙芝居を楽しむ」へと変わったこ

とを積極的に取り上げ、「紙芝居」の教材化を図る。

5. 「紙芝居」の教材化を通して、新⑦の保育士等や友達の言葉や話に興味や関心をもって、聞いたり、話したりするとした内容を「保育内容言葉」の学びの集大成ととらえる。

V. 学生の調査による自身の喃語の発達

1. 学生自身の乳児期の喃語調査 (2017. 11)

1～3ヶ月頃	4～5ヶ月頃	6～7ヶ月頃	8ヶ月頃～
母音発声 (クーイング)	子音発声	反復の喃語	喃語のピーク
〈30〉 う	〈18〉 あーあー	〈12〉 だぁだぁ	〈3〉 まんまん・んまんま
〈21〉 あー	〈11〉 ぶー	〈17〉 まんまんま	〈3〉 まま・ままー
〈17〉 あーあー	〈9〉 うーうー	〈6〉 ぶー・ぶーぶー	〈2〉 ワンワン (犬)
〈7〉 あっ	〈4〉 あーうー	〈4〉 ぶーぶー	〈2〉 まんま
〈4〉 うあ	〈4〉 ばぁ	〈2〉 あーうー	〈2〉 にゃんにゃん
〈4〉 あーぶっ	〈4〉 ば・んば	〈2〉 きーきー	〈1〉 ぱっぱっぱっ (パパ)
〈2〉 ん	〈4〉 ぶ・ぶう	〈2〉 だあー	〈1〉 まんまんまん (ママ)
〈1〉 んあー	〈3〉 あうあう	〈2〉 ばばば	〈1〉 まー (ママ)
〈1〉 あーうー	〈3〉 だあー	〈2〉 んばあっ	〈1〉 がか (母)
〈1〉 いーいー	〈3〉 ん・んむ・んあ	〈2〉 ばばば	〈1〉 にーい (兄)
	〈2〉 あっあー	〈1〉 あたー	〈1〉 ぶー
	〈2〉 あいあい	〈1〉 あうあう	〈1〉 にゅうにゅう (牛乳)
	〈2〉 たあ	〈1〉 あぐー	〈1〉 まままま (ごはん)
	〈2〉 だーだーあだー	〈1〉 あんま	〈1〉 んまっまっ (食後の反応)
	〈2〉 ばあー	〈1〉 うえー	〈1〉 ぶっあっ (車指差し)
	〈2〉 ふぁ	〈1〉 おーおー (催促)	〈1〉 ないない (しまう)
	〈2〉 まあ	〈1〉 ぐー	〈1〉 あーん
	〈1〉 あぶー	〈1〉 ぱい (おっぱい)	〈1〉 ぶー (唾をとばす)
	〈1〉 いーいー	〈1〉 ぱあ	〈1〉 ばいばい
	〈1〉 うーわあー	〈1〉 ばあ	〈1〉 う～あ～ (うれしさ)
	〈1〉 えあーお	〈1〉 ばあば	〈1〉 たっち (立つこと)
	〈1〉 おー	〈1〉 ばぶばぶ	〈1〉 しーしー
	〈1〉 じじじじー	〈1〉 ぱぱぱ	〈1〉 かんぱー
	〈1〉 だーだん	〈1〉 ぶー (湯冷まし)	〈1〉 ねんねん
	〈1〉 ちー	〈1〉 わんわん	〈1〉 むー (虫)
	〈1〉 ぱい	〈1〉 まーまー	〈1〉 ブーブ (車)
	〈1〉 ぶうぶう	〈1〉 まんま	〈1〉 じゅわんと (ぶらんこ)
	〈1〉 プー		〈1〉 ぼう (犬)
	〈1〉 ほおー		〈1〉 ぱんぱんぱん (アンパンマン)
	〈1〉 にゃ		〈1〉 あばー
	〈1〉 まむまむ		〈1〉 ブーちゃん
	〈1〉 やー		〈1〉 ばーばー
	〈1〉 じゃーじー		〈1〉 きゃあーきゃあー
	〈1〉 んふ		〈1〉 だっだん
			〈1〉 たんたん
			〈1〉 ていてい

2. 学生自身の喃語調査から読み取れること（学生自身のまとめより）

- (1) <1～3ヶ月頃> 母音発声（クーイング）の段階においては、狭い口腔から出てくる母音が主体だと言うことが、よく分かる。しかし、今回の調査の中では「エ」という発音はなかったこと。母音以外の「ン」が口を閉じたときの発音としてみられた。
- (2) <4～5ヶ月頃> 子音発声の段階においては、やや広がった口腔から出てくる、口を開いたときの母音と、口を閉じたときの「ン」の発音が組み合わさった発音、並びに破裂音との組み合わせにより、乳児自身が音を楽しむ様子も見られることも分かった。
- (3) <6～7ヶ月頃> 反復の喃語の段階においては、喃語の繰り返しが見られ、この時期における保育士や周りの大人が、その繰り返しを同じ繰り返しで返すことが重要だということが分かる。その上で、この時期の保育士の役割自体も理解できる。
- (4) <8ヶ月頃～> 喃語のピークの段階においては、人やものとの関連が見られ、乳児自身の中に、自己主張や要求、言葉による感情表現の芽生えが見られること、そして繰り返しから二語文への変化の兆しが見られることなどが分かった。
- (5) 新しい幼稚園教育要領で、述べられた「喃語－片言－二語文－ごっこ遊びでのやり取り」という言葉の発達段階における前半の「喃語－片言」そして二語文へと発達する兆しまでの理解がこの学生自身の喃語調査によって明らかとなった。

3. 喃語調査を活用した授業構成（主体的で対話的なより深い学び）

- (1) 主体的で
 - ① 学生自身による自分自身の0歳児調査
～調査方法「父母への聞き取り（特に母親）、祖父母への聞き取り、母子手帳、乳児の頃のビデオ」などが代表的なものである。
- (2) 対話的な
 - ① 学級での集約の時、その共通点や他の学生とは異なる点による「何を訴えようとしているのか」と言った話し合いを行うことができる。
- (3) より深い学び
 - ① 「喃語－片言」そして二語文へと発達する日本語の獲得過程での、保育士の発達への関わり大きさなどが必要なことがわかる。

VI. 乳児の表情から読み解く

1. 3枚の写真（笑い顔、泣き顔、困り顔）の提示

【1枚目】写真A（線画変換済）から（複数回答）（82名）

- ・楽しいな・うれしいな 54人
- ・面白いものがあるよ・面白いな 24人
- ・遊ぼう・遊んで・かまって 17人

・ママ、パパの顔面白い	6人
・おいしいな・おなかいっぱい	6人
・抱っこして	4人
・おっぱいみたい	3人
・できた	2人
・見せて	2人
・これなあに	2人
・ママ好き ママ素敵 ママだ	6人
・もっと話して・お話できるよ	4人
・ママ何しているの？	2人
・もっとして	2人
・それ欲しい・ちょうだい	2人
・あのおもちゃ好き	2人
・おもちゃかして	2人
・お風呂気持ちよかったよ	2人
・こっち向いて	1人
・名前を呼ばれて「あー」	1人
・パパは？	1人
・こっちへきて	1人
・知ってるよ	1人
・すごいでしょう	1人
・お外に散歩行きたい	1人
・見つけた	1人



< 4ヶ月頃の笑顔の写真A（線画変換済）>

【学生の読み取り傾向】

(1) 乳児の感情を読み取る程度の「楽しいな」「うれしいな」が全体の66%と、約2/3を占めている。まだ保育士になっていない学生段階では、精いっぱいの読み取りなのかもしれない。

(2) ところが「面白い」表現が合わせて30人と、全体の36%となっている。

この段階では、乳児が何かの対象や事象に注目しているのではないかという推し量りへと、想像を膨らませることができている学生が、現段階で1/3程度いることがわかる。

(3) さらに一歩進んで、何とかして乳児の訴えを読み取ろうと「遊ぼう・遊んで・かまって」「おいしいな・おなかいっぱい」「抱っこして」「おっぱいみたい」など、乳児とコミュニケーションを図ろうとしていることは、少人数ではあるが何とも頼もしい。

【2枚目】写真B（線画変換済）から（複数回答）（82名）

・おむつをかえて欲しい	42人
・おなかがすいた	34人
・眠たい	17人
・抱っこして	11人
・怖い	9人
・行かないで	8人
・それちょうだい	3人
・嫌だ	3人
・悲しいよ・寂しいよ	3人
・どこへ行くの	2人
・どうしてわかってくれないの	2人
・そうじゃないよ	1人
・気づいて	1人
・気にいらない	1人
・もっと遊びたい	1人
・驚いた	1人
・具合が悪い	1人
・眩しい	1人



< 4ヶ月の頃の泣き顔の写真B（線画変換済）>

【学生の読み取り傾向】

(1) 学生は泣き出しそうな乳児を見て、訴えたいことを何とかして読み取ろうとしている。

これは人間の本能的なものなのかもしれないし、泣くという乳児の表現は周囲の人間に対して、かなりのインパクトを持って働きかけているとも言える。

(2) 上位の「おむつをかえて欲しい 42人」「おなかがすいた 34人」「眠たい 17人」「抱っこして 11人」「怖い 9人」「行かないで 8人」「それちょうだい 3人」「嫌だ 3人」は、乳児の一方的な訴えとほとんどの学生が読み取っている。

(3) ところが、それ以下の少数の中には「悲しいよ・寂しいよ 3人」「どこへ行くの 2人」「どうしてわかってくれないの 2人」「そうじゃないよ 1人」「気づいて 1人」「気にいらない 1人」「もっと遊びたい 1人」「驚いた 1人」「具合が悪い 1人」「眩しい 1人」に至ると、保育者が行動を起こすというよりは、感情を読み取った上に、返答をしたり、声掛けをしたりといった、言葉をつなげる必要があることを、学生自身が気付き始めていることが読み取れる。

これらのことは、(新)内容の取扱い①の「身近な人に親しみをもって接し、自分の感情などを伝え、それに相手が応答し、その言葉を聞くことを通して、次第に言葉が獲得されていく

ものであることを考慮して、楽しい雰囲気の中で保育士等との言葉のやり取りができるようにすることという、保育士と乳幼児とのコミュニケーションの重要性を裏付けるばかりでなく、幼児教育の教員養成にとって不可欠な指導法であること示しているといえる。

【3枚目】写真C（線画変換済）から（複数回答）（82名）

・どうしたの・何？	40人
・これなあに	33人
・驚いた	7人
・まだお腹すいてるよ	6人
・誰なの？	6人
・うんちでたよ・おしっこしたよ	5人
・呼んだ？	2人
・何と言ったの？	2人
・何の音？	2人
・どこ行くの？	1人
・痒い	1人
・違う	1人
・眠い	1人
・しゃっくりが止まらない	1人
・不思議	1人



<4ヶ月頃の困り顔の写真C（線画変換済）>

【学生の読み取り傾向】

(1) ここでは3枚の中で、読み取りが一番むずかしいであろう「乳児の困り顔」を提示している。やはり「どうしたの・何？ 40人」「これなあに？ 33人」「驚いた 7人」といった直接的な困り感を訴えていると読み取った学生がほとんどであった。

(2) ところが、3枚目の読み取りということもあって、「まだお腹すいてるよ 6人」「誰なの？ 6人」「うんちでたよ・おしっこしたよ 5人」「呼んだ？ 2人」「何と言ったの？ 2人」「何の音？ 2人」「どこ行くの？ 1人」「痒い 1人」「違う 1人」「眠い 1人」「しゃっくりが止まらない 1人」「不思議 1人」というように、答えを要求している読み取りを行う、想像性豊かな学生が少数であるが出てきている。

2. 学生の読み取りからわかったこと

訴える手段として、表情と喃語しか持たない乳児に対して、保育者としては、単に感情の読み取りだけでは、後の手立てが少なくなる。今回、学生なりに想像力を働かせて、コミュニケーションを図ろうとする努力が見られたことは、大きな収穫であった。

3. 表情の読み取りを活用した授業構成（主体的で対話的なより深い学び）

（1）主体的で

① 学生自身による乳児の表情からの読み取り

～3枚の写真（笑い顔、泣き顔、困り顔）の提示による表情からだけの読み取り

（2）対話的な

① 学級で集約し一覧にする。その時、その共通点や他の学生とは異なる点による「何を訴えようとしているのか」と言った話し合いを行う。

（3）より深い学び

① その写真を撮影した時の状況を学生に伝え、さらに想像を膨らませることによってそれぞれの子どもの発達状況に応じて、遊びや関わりの工夫など、保育の内容を適切に展開することが必要であることや、保育士の乳児への関わり方の多様性を見つけさせる。

VII. 体験と言葉掛けを重視した授業を目指して

「体験と言葉掛けを大切に」と一言で言うのは容易だが、「体験」だけとっても幼稚園や保育所の保育者にとって、その準備から振り返りまで、大変な労力と粘り強さが必要であり、体験を通して言葉の活用力を育てていくのは並大抵なことではないと考える。

ましてや「言葉掛け」ともなれば、労力と粘り強さに加えて、経験量が必要になってくるとは言うまでもない。しかし、経験の量は必ずしも勤続年数や年齢に比例して増えないという厄介な面も含んでいることも確かである。

ここは、やはり学生時代から保育を自分事として捉え、保育現場に出た時には、その吸収力や想像性、ひいては幼児に対する愛情を前面に出して向き合ってもらいたいものとする。

平成30年度から「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」が改定されることを受け、ここでは「保育内容言葉」という内容領域を通して、その言わんとしていること、社会的ニーズ、将来の日本や日本人の姿、教員養成の在り方、授業のあるべき姿などを追ってきた。

しかし、もっとも根幹には子供への愛情、保育の楽しさ、幼児教育の大切さなどがあることが必然であり、そのための教員研修であろうと考える。

VIII. 参 考 文 献

- ・厚生労働省編 保育所保育指針（2008年版）（2018年版）
- ・文部科学省編 幼稚園教育要領（2008年版）（2018年版）
- ・文部科学省編 小学校学習指導要領（2011年版）（2020年版）

